456

訂正
觀世流謠曲百拾番

白樂天

78

白樂天

松島へ唐のたよりの賓客白樂天、天竺の秋末也、扨も是より東よ當つくし迄あり、ひろを日本と名つくる故なり、日本の智惠をうれとの宣旨を受て、今海路より舟漕出らく目ぬきとのく

明治文庫

甚方の海を等んや東海の波路
さらかよ行舟の影
遠く雲の旗手の天津空月まる
出る甚方よりやこしもめくるも
あく日本の地をあるまりく

早内
海路をへて意作程よ早くなりや日
本の地をそ稽洲所よ磯を見

日本のやうを詠めやと作
さらぬひの築洲の海の月ほるを
月の三ほる。亂ゆう邪　湖水滿
とて碧浪天をひく都を辞き
もんきいう扁舟よ棹をうつとなる
湖の煙の浪のよやとおひたる
わうり蓋面目の海よやまや松浦ふ

西よ山ちかき有明の月の入雲も
海ゝや豊津永路のなかなる
さゝ波ゝ唐土永路の
揺も寄せかへりと風かよ
月も狂ちかきぬる弱ゝ引れ
萬里の波濤を去つゝ日本の地よ
もつきあ見えよ小舟一艘字ゝ引れ

漁翁也ゝ有まゝ成ハ日本の者
けりん見ハ日本の漁翁ゝ序
唐ゝ白楽天ゝくまゝ海ゝ
ゝきやゝ沈ゝ濃ゝたゝを白
楽天ゝみゝすハ行の故ゝそゝや浪
ゝ翁ハ漢土の人ゝ者ゝ去ゝ
て日本ゝ来ゝ隠ゝおきゝハ者ゝ

平九九 たゝひ其名を國ゆるされたるや
うてを知下ぬるへきすを思されを
天下 日本の智惠をくらんとて樂天まり
ぬつへきとつぬそなまねき日の本中
ふ西を詠めて中の方より流てよこか
きい人多よとりやうれそころつ
えしよ 青海 人やくと松浦舟く

ぬよとみていかくれあき唐土船の加
人を楽天をみるふ行ふそふ物なふ
公元 公元 公元 公元
へきぬつつやとけやく唐人あれハ
出言葉をもとそもやもちふハ行ぬ
より釣棹の賤をや釣者きんく
早内 ぬ寿へきすあり毒を思ふ人
ぬつよ漁翁扨ろ日本よハ行すを

撥うう（シテ）撥唐土よ行ト（ワキ）を撥ひ給
仙そ（ワキ）唐よ当詩を作つく遊つよ
（シテ）月本の月を月をよみて人の心を慰ん
（ワキ）ア（シテ）を月と当いうよ　（シテ）天住の雲
文を唐土の秘賊と。唐土の詩賦を
をつて我朝人とくらきハ三国を
やうを来るを出て大よやうく
立て大和哥とよめるとうめされ
て人丸歌の心を発きんため作お
（ワキ）いや具儀みていたいたいてけうハ目前
つ気色を物よ作つくゆきう。青
苔家をおひていもほの扉よ掛里
白雲等よ似ちく山の腰をめ家心乃
くるか漁翁（シテ）青苔屋を当物をき

苔の巖の所よりかれるか宮ゝ似
まとうや白雲等ゝ似く山の腰を
めぐる白しく月本のうもたく
見ゆ苔寒きいる岩ほはらめく
てきあく山の常をとる小川
やお見ず主賜ゝ漁翁ゝ心
ある詠子をつくめる。裏ずなる成

人や隠　人かまりやおりもなき
者ありぬ仮名序を讀ゝ人間の
ゝよ限ゝくしぬ世とはなる物多よ
ゝを後ぬはあきあもとすやいき
ゝとはまるあと。拙ゝ多新書ま
ゝ迄も　和歌を詠ゝ裏ゝ
和国ゝ拾ゝく　證歌多ゝ　郡ゝ

帰鴈水ゆとある蛙を唐土の人
日本ゆ人ぞを強ても大和子を
もかゆとくく讀ありウヤ抑うくし
とつぞもとりの人ら詩子ゆ孝鍾
天皇の浄宮かとゆ大和国高天寺
ゆとむ人のぞ狂の書乃ぞ行鶯
梅ゆ学乃ぞ参りて鳴き声をゆ初

陽毎朝来不相違本栖と書く文
字ゆ学て見をきぞ三十一文字
乃詠子つ成ありきと初陽
雲あ乃ぞ毎ゆ来れぞ乃そて
毎ぞ乃栖みとゆそつる鶯の拝
を始てぞ乃ぞ乃ぞ乃ぞ乃ぞ乃ぞ乃
よたくて子ぞ乃ぞ乃ぞ乃ぞ乃ぞ乃

あらそう海乃濱の美濃乃物しらす
としいきるわ行きも言とよ世なり
言葉や和國の風俗ぶりくぶかき海
人の言葉有難き習ひうれ　中和
國のもて遊び和歌をえらく舞
歌の曲具をくを顯はん　そもや
みくの遊びとぶをやくくへ新

誰なくとても古俗をよ我くよあり
八洲舞楽の　鼓音濱の音笛八龍
乃吟もれ老。舞人八代射う者の
あうとよたくく。言葉よ深ひつ海
青楽をまくへや　岩原乃　國も
動く。萬代迄よ　山陰ぶくく
水のまき海の　浪乃ぶくく言の海

青樂　西の海をきう頂の波
岡より玉顔を出し住吉の神のもとみ
よりのかすかすのあらそ出
住吉の神のもとみ
の方へ行
給へやうよ浦の波立海り給へ
樂天　もとみより現へ給へく

伊勢石清水賀茂うひかい嚴島三潟
諏方熱田鹿島藝の嚴島の明神当
沙竭羅龍王の第三の姫をやうて
海よりうかみて海青樂をまひ
給へ大弱王ちとの曲を
うう豊海よかきりつまひ遊ふ
小忘ろもの神かきよ吹をと

かくて唐船爰より漢土に帰
りけりありがたや神ときありがた
かや神と君が代の動かぬ国ぞ
ひさしき

右之本者観世太夫織部以章句
眞本令版行畢
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
旧 山本長兵衛

明治廿六年二月十七日印刷
明治廿六年二月同日訂正出版
明治廿六年三月廿九日別製本御届

定價三銭五厘

東京市麹町區飯田町四丁目壹番地
宮内省御用達
訂正者 観世清廉
京都市上京區二条通御幸町西エ入
發行者兼印刷者 檜常之助

板權所有